

歴史と文化を 考えよう

07 江東区文化財保護強調月間

上・明治45年7月19日に披露された角乗
下・明治45年7月19日に披露された手古舞

(いずれも土木学会土木図書館所蔵)



角子舞(内ノ舞) 隅田川に架かる大橋の北詰七五三の道端



下町文化

NO. 239
2007.9.27

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

○07江東区文化財保護強調月間

民俗芸能大会

旧大石家特別公開

文化財講演会

江東ものづくりフェア

○深川江戸資料館特別展

「掘割が町をつくる

～江東の400年～」

○中川船番所 平成19年特別企画展

「江東区のたからもの」

江東歴史紀行

「新大橋をわたる人、まもる人」

大江戸八百八町を掘る！

ここにも歴史があった

「読書の秋」「食欲の秋」。秋は様々な活動がしやすくなる季節ですが、「文化の秋」を忘れてはなりません。今年も10月4日(木)の公開講演会を皮切りに民俗芸能大会、旧大石家住宅の特別公開、江東ものづくりフェアと様々なイベントが目白押しです。

上の写真は明治45年(1912)7月19日に鋼鉄橋に架け替えられた新大橋の開橋式において披露された角乗と手古舞の写真です。今年も10月21日の区民まつりでこれら脈々と受け継がれてきた技が公開されます。

また、江東ものづくりフェアでは職人さんによる実演公開、体験教室を中心に、伝統工芸師の後継者による「伝統を継ぐもの展」、工芸品チャリティーバザールなどを行います。是非この機会に江東区の歴史や文化に触れてみてください。

深川江戸資料館、芭蕉記念館、中川船番所資料館でも多くの企画を用意しています。深川江戸資料館では特別展「掘割が町をつくる～江東の400年～」、中川船番所資料館では開館5周年特別企画展「江東区のたからもの」、芭蕉記念館では時雨忌講演会、そして3館合同の史跡めぐりなど、各館のイベントも盛り沢山です。こちらにもふってご参加下さい。

10/21(日) 江東区民まつり

民俗芸能大会

入場無料



【午前の部（午前11時～12時30分）】

場所 木場公園内入口広場

木場の角乗

江戸時代に木場の筏師（川並）は水に浮かべた材木を、鳶口ひとつで乗りこなし、筏を組んでいました。角乗はその仕事の余技として生まれました。

（都指定無形民俗文化財）

【午後の部（午後1時～3時50分）】

場所 木場公園内ふれあい広場

木場の木遣

川並衆が材木を操るときに互いの息を合わせるために詠われた労働歌です。

（都指定無形民俗文化財）

木場の木遣念仏

木遣とともに大数珠を手繰って念仏を唱える大変珍しいものです。

（区登録無形民俗文化財）

砂村囃子

砂村囃子保存会

江戸時代中期に金町の香取明神社（現葛飾区葛西神社）の神官が百姓に教えた祭囃子の流れをくむお囃子です。

（区指定無形民俗文化財）

富岡八幡の手古舞

富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の大祭で神輿の先頭に立ち、木遣を唄いながら、男鬘に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は辰巳芸者が行いました。

（区登録無形民俗文化財）

深川の力持

深川力持睦会

江戸時代から倉庫地域であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化したものです。

（都指定民俗無形文化財）

* 力持終了後に「力餅」を配ります。

10/22(月)～28(日)

旧大石家特別公開

入場無料



旧大石家
住宅は江戸時代に建てられた区内最古の木造民家です。

現在区指定有形文化財として、旧大石家住

宅友の会の皆さんによって大切に保存されています。普段は土・日・休日のみ一般公開していますが、この期間は

10/24(水) 文化財講演会

近代深川の商人たち
— 明治期の米商人 —

受講無料

場所 江東区教育センター大研修室

（東陽2-3-6）

定員 80人（先着順）

申込 電話で生涯学習課文化財係へ

申込・問合せ
生涯学習課文化財係

☎3647-9819

* 区報、ホームページでもご案内しておりますのでご覧下さい。

HPアドレス

<http://www.city.koto.lg.jp/seikatsu/shogai-gakushu/>

11/3(土・祝)～11/4(日)

江東ものづくりフェア

入場無料

伝統技術によるものづくりに関して、さまざまなイベントを行います。江東区に伝わる伝統文化に触れるまたとない機会です。たくさんの方々のご来場をお待ちしています。

会場 森下文化センター(森下3-12-17)
時間 午前9時～午後5時

●第26回 伝統工芸展

区の無形文化財(工芸技術)保持者の方々の作品を一堂に展示します。期間中、職人さんの技を実際に見学できる実演公開が行われます。また、職人さんの指導を受けながら、ものづくりの体験もできます。実演・体験の日程は下記の表をご参照ください。

【体験申込み】当日会場にてお申し込みください。なお、教材費がかかります。

のでご注意ください。

●第2回 伝統を継ぐもの展

無形文化財保持者の指導を受けた職人さんたちによる作品を展示します。今回も力作が展示されます。受け継がれていく確かな技をご覧ください。

●工芸品チャリティバザール

期間中、江東区伝統工芸保存会主催による伝統工芸品の販売が行われます。

当日は様々な実演を実施します！



伝統工芸技術の実演・体験日程

日 時	10:00～12:00	13:30～15:30
11月3日 (土・祝)	江戸指物 山田一彦 はしをつくってみよう(し置き付き) 定員8名 費用 1,200円	江戸指物 山田一彦 実演 「指物を組み立ててみよう」(無料) 作品を持ち帰ることはできません
	相撲呼び出し裁着袴 富永 皓 実演 「裁着袴をいれてみよう」(無料) 作品を持ち帰ることはできません	相撲呼び出し裁着袴 富永 皓 実演 「裁着袴をいれてみよう」(無料) 作品を持ち帰ることはできません
	江戸木彫刻 岸本忠雄 桐の文箱に文字を彫ろう 定員8名 費用 2,000円	縫紋 天野一政 実演
	更紗染 佐野利夫・勇二 東海道五十三次額絵「箱根」を染めよう 定員7名 費用 2,000円	更紗染 佐野利夫・勇二 実演
	襖・櫺 鈴木延坦 実演 手描友禅 和田宣明 実演 刀剣研磨 臼木良彦 実演	襖・櫺 鈴木延坦 実演 手描友禅 和田宣明 実演 庖丁製作 吉實庖丁店 実演
11月4日 (日)	簾製作 豊田 勇 色紙掛けをつくろう 定員4名 費用 500円	江戸木彫刻 渡辺美寿雄 実演
	建具 木全章二 実演 組子コースターをつくろう 定員8名 費用 1,000円	建具 木全章二 二ツ折衝立をつくろう 定員8名 費用 2,000円
	江戸切子 小林英夫 実演 板ガラスに溝を彫ってみよう 定員12名(30分交代制) 費用 200円	江戸切子 小林英夫 切子皿(約16cm)をつくってみよう 定員10名 費用 1,500円
	江戸表具 岩崎清二 実演	江戸表具 岩崎清二 ミニ屏風をつくろう 定員6名 費用 1,500円
	象牙細工 前田賢次 実演 建具 友國三郎 実演 「カンナ引き体験」(無料) 作品を持ち帰ることはできません	刀剣研磨 臼木良彦 実演 建具 友國三郎 筆箱をつくろう 定員8名 費用 1,500円

は体験(職人教室)です。申し込みは当日会場にて受付いたします。内容は変更になる場合もあります。



交通

- 地下鉄新宿線・大江戸線「森下駅」下車A6出口より徒歩10分
- 地下鉄半蔵門線・大江戸線「清澄白河駅」下車A1・B2出口より徒歩12分
- 都バス「門33」[亀戸駅前～豊海水産埠頭]「高橋」下車徒歩5分・「業10」[業平橋駅～新橋]「森下5丁目」下車徒歩5分

深川江戸資料館特別展

「掘割が町をつくる」 江戸の400年

江東地域は内陸河川の運河が縦横に開かれていた町です。「川と橋の町」というこの光景は、現在でも江東区の特徴となっています。

江戸が形成される以前は臨海部だった亀戸北部に開削・整備された北十間川。徳川家康が江戸入府から間もなく、行徳からの塩の輸送のために開いたという小名木川。明暦の大火後の開発で開かれた豊川や大横川、横十間川。隅田川沿岸の材木置場に造られた掘割が、やがて東へと伸びて大きな水路となった仙台東、油堀。城東地域の新田開発に貢献した境川。さらに幹線の運河から枝のように広がる小河川。

さながら「掘割網」ともいえる水路が形成されました。そしてこのひとつひとつの掘割成立

の背景には江東地域のみならず大都市・江戸の成立や

発展の過程が色濃く反映されています。



葛飾北斎「富嶽三十六景 深川一万年橋(複製)」深川江戸資料館所蔵

この特別展では文献や絵画資料等をもとに江東地域を特色付けている掘割とその沿岸の歴史や文化、くらしについて紹介します。ご来場をお待ちしております。(深川江戸資料館 久染健夫)



昭和30年代の大横川 亥の堀橋から扇橋方向をのぞむ。堀には筏、沿岸には製材所・工場が建ち並び

展示構成

深川の成立(小名木川)

元木場の堀(仙台東・油堀など)

本所深川の開発

(北十間川・大横川など)

深川南部の川

(大島川・木場内の河川)

城東地域の堀(境川など)

* 内容は変更することもあります。

期 間 11月10日(土)～25日(日)

午前9時30分～午後5時

(入館は4時30分まで)

休館日 11月12日(月)

場 所 深川江戸資料館 レクホール

料 金 大人300円 小中学生50円

* 展示室観覧料に含まれます。

* 小中学生のみの観覧はできません。

講演会

「関東の河川水運と小名木川」

関東全域につながる深川の掘割の位置付けを、関東の河川流通の観点から

お話ししていただきます。

日 時 11月16日(金)

午後6時30分～8時30分

講 師 川名登

(千葉経済大学名誉教授)

会 場 深川江戸資料館小劇場

定 員 232名

参加費 500円

応募方法 『カルチャーナビ』10月号または『江東区報』10月21日号を

10月21日号をご覧ください。

三館合同企画

江戸と西から東からウォーキング

～芭蕉記念館・深川江戸資料館・中川船番所資料館～

江東区の歴史文化施設3館を見学しながら、周辺の史跡や文化財をあ

わせてめぐります。

日 時 11月10日(土) 23日(祝)

10～15時(9時50分集合)

* 深川江戸資料館・中川船番所資料館のいずれに集合、出発。

定員 各日80人(合計160人)

参加費 500円 *当日持参

* 交通費、昼食は各自用意。

【おもなコース】

深川コース

深川江戸資料館・霊巖寺・紀文

講師 教育委員会認定文化財ガイド員

応募方法 『カルチャーナビ』10月号

『江東区報』10月11日号

をご覧ください。

中川船番所資料館 平成19年度特別企画展

「江東区のたからもの」

中川船番所資料館では、10月31日(水)から11月25日(日)まで、特別企画展「江東区のたからもの」を開催します。

今年は江東区が誕生してから60周年、財団法人江東区地域振興会が設立されてから25周年、中川船番所資料館が開館してから5周年と、それぞれ節目の年にあたります。

今回はこれらを記念して、現在までに江東区教育委員会が収集・保管してきた文化財や、区民の皆様からの寄贈品など、貴重な「江東区のたからもの」を一堂に公開します。その一部をご紹介します。

富山藩家老近藤家文書

近藤家は加賀藩の藩祖・前田利家が尾張にいたところからの家臣で、寛永16年(1639)に富山藩が成立した時にその家老となり、代々藩の要職を務めた家です。昭和60年に江東区教育委員会に寄贈された文書は実に2170点を数えます。

今回はその中から、利家の子で初代加賀藩主の利長(利勝)の発給文書を中心に数点を展示します。

この他にも徳川家康・榊原康政などの戦国武



慶長10年12月21日付 前田利長発給 知行所目録(近藤家文書)

将や、仙台藩四代藩主・伊達綱村の発給文書など、教育委員会所蔵の古文書も公開予定です。

描かれた江東地域

教育委員会では多くの浮世絵や絵図を収集し、中川船番所資料館の収蔵庫で保管していますが、今回は江東区に



『東京名勝図会』三拾三間堂 通矢之図

江戸時代には亀戸天神や梅屋敷、富岡八幡宮、深川三十三間堂など、明治以降は深川周辺を題材としたものが多

く見られます。いずれも江戸・東京の近郊にあった江東地域の姿をよく映し出した貴重な資料です。

また、江戸の町を描いた「分限江戸大絵図」や、小名木村(現在の大島3〜9丁目)の絵図なども展示する予定です。

昔の生活用具

教育委員会では、区民の皆様から寄贈いただいた貴重な資料を多く保管していますが、普段は資料館などの収蔵庫に置かれているため、あまりご覧いただく機会がありません。

そこで今回、「区民のたからもの」として、区内の自警消防団が使っていた半纏や頭巾などの装束を展示します。また、実際に使われていた道具を元に、昔の生活のようすを再現します。

この他にも江東区指定文化財・登録文化財となった資料を中心に、区内にある貴重な文化財を可能な限りで公開します。詳しい話をお聞きになりたい方は、11月25日(日)の午後1時から、職員によるミュージアムトークを開催します。ぜひご来館ください。

なお、特別企画展の設営のため、10月30日(火)は臨時休館とさせていただきます。

(中川船番所資料館 鈴木将典)

開館時間 午前9時30分〜午後5時
(入館は4時30分まで)

休館日 毎週月曜日

入館料 200円(小中学生50円)

交通 都営地下鉄新宿線 東大島駅(大島口)下車 徒歩5分

問合せ 江東区中川船番所資料館

電話 03(3636)9091

10月7(日) 時雨忌(芭蕉忌)講演会

10月12日の芭蕉の命日を偲んで講演会を行います。

演題

「古池に蛙は飛びこまなかつた」

講師

長谷川耀(俳誌「古志」主宰)

時間

午後2時〜3時30分

場所

芭蕉記念館1階会議室

(常盤1-6-3)

定員 80人 無料

先着順(定員になり次第〆切)

申込

記念館窓口または電話で

3631-1448

新大橋をわたる人、まもる人

「川向こう」へ渡るには…

江戸の新開地「本所深川」。隅田川に隔てられたこの地域に足を踏み入れるには船で乗り付けるか、橋を渡るかの2通りしかありませんでした。江戸時代、隅田川に架かる橋は北から千住大橋、吾妻橋、両国橋、新大橋、永代橋の五橋があり、江戸城下と本所深川とを結ぶ動脈として重要な役割を果たしていました。



『江戸名所図会』新大橋三泓

（本所深川への架け橋 新大橋の交通量と維持管理）

深川に向かうには新大橋（現常盤1-6）か、永代橋（現佐賀1-6）を渡りましたが、どれくらいの人々が利用していたのでしょうか？

国立国会図書館の旧幕引継書という史料群のなかにこの問いに答えてくれる史料があります。「新大橋渡銭之高書上」という史料には天明4年（1784）から寛政10年（1798）まで、月ごとに毎月何人が渡り、渡銭料がいくら入ったかが記されています（ただし部分欠）。

新大橋の架橋

新大橋の通行量についてお話しする前に、「渡銭？」、「橋つて渡るのにお金が必要だったの？」という疑問が湧くのではないのでしょうか。そうです、江戸時代のある時期、新大橋を渡るにはお金を払わなければなりませんでした。それではなぜ通行料が必要だったのか、それがどのように使われたのかについて新大橋の歴史をひもときながら見ていきましょう。

新大橋は隅田川に架かる3番目の橋として、元禄6年（1693）12月5

日に完成し、7日に渡り初めが行われました。当時、隅田川東岸の開発が本格的に進みこの辺りも急速に町として発展し、幕府は新大橋を架けることとしたのです。橋は浜町の水戸藩邸から架けられ、長さ108間（約196m）にわたりました。工事は東湊町一丁目の商人白子屋伊右衛門が請け負い、晴天で80日の予定をわずか52日で完成させたそうです。使用した材木は967本、費用は護岸の整備費用を含めて約3100両という大工事でした。新大橋の名前は当時両国橋が「大橋」と呼ばれていたのに対して名付けたといわれています（千住大橋に対してという説もあります）。この辺りに住む人々は新大橋の架橋を心待ちにしており、松尾芭蕉が「ありがたや、いただいて踏む、はしの霜」と喜びをあらわした句を詠んだのは有名な話です。

橋廃止の危機

さて、橋は架けつばなしという訳にはいきません。当然管理が必要になります。また、大風雨などによる災害の後には架け直しや補修をしなければなりません。とりわけ享保4年（1719）の大風雨は新大橋を大破させ、再建に6127両もの費用がかかりました。その後も新大橋は度々破損し、とうとう延享元年（1744）幕府は橋の廃

止を検討します。しかし、幕府が町の人々の意見を聴いたところ、深川町名主八郎右衛門以下10名の町名主によって、新大橋を町で管理する願いが出されました。これに対して町奉行所から新大橋最寄りの町に限定して再出願するようにと命じ、翌年7月12日に正式に深川町名主八郎右衛門、清住町名主弥兵衛、海辺大工町名主八左衛門、森下町家持半七、御船蔵前家持宗兵衛による運営、管理が認められたのです。

橋の運営と維持管理

しかし、町は幕府のような巨大な財源を持っているわけではありません。維持管理の費用はどうしたのでしょうか。財源は4つありました。1つ目は江戸川（現神田川）の川浚いの請負、つまり公共事業の受注です。2つ目は橋際の東西広小路・土呂場・葦簀張商場の権利、3つ目は本所相生町・深川橋富町の権利、そして4つ目として渡銭の徴収が許可されました。

渡銭は武士以外（付随する仲間なども含む）、つまり町人、百姓、町医、出家、荷物背負、町駕籠、駄賃口取が対象とされ、1人あたりの通行料は片道銭2文でした。現在のお金になおすと、当時、かけそば1杯が16〜24文でしたので、これをもとにするとだいたい50円といったところでしょうか。

橋の東西際には下番屋が置かれ、橋の管理人である「下代」のほかに「渡銭取」と呼ばれる渡銭料の徴収係がいて料金を集めていました。

橋の通行量

それでは一体どのくらいの人が新大橋を利用していただのでしょうか。下の表は天明5年(1785)の毎月の渡銭料(銭高)、日数・天候、そこから割り出した通行量を示したものです。例えば1月をみますと、渡銭料が182貫636文ですので、これを1人あたりの通行量(2文)で割ると、月に9万1318人が渡ったことになります。さらにこれを30で割ると、1日あたり3044人となります。通行量は3月8月にピークをむかえ、多いときには月に15万人以上になりました。これを12ヶ月分積み重ねると、年間で2568貫215文(約6400万円ぐらいでしょうか)となり、1年間で実に128万4108人もの人が利用していたことになります。なお、武士からはお金を取りませんので実際はもっと多くの人が利用していました。そうすると毎日、多い時には5〜6000人、少ない時でも3〜4000人の人々が往來していたことになります。

天明5年だけが飛び抜けて多いわけではありません。天明4年から寛政9

天明5年(1785)の新大橋渡橋料金

月	1ヶ月の渡銭 (貫文)	快晴 (日)	雨天 (日)	1ヶ月の 通行量(人)	1日あたりの 通行量(人)
1月	182.636	23	7	91,318	3,044
2月	182.546	17	12	91,273	3,147
3月	231.971	21	9	115,986	3,866
4月	215.718	15	14	107,859	3,719
5月	215.616	21	8	107,808	3,718
6月	303.108	21	9	151,554	5,052
7月	297.072	20	10	148,536	4,951
8月	223.364	13	16	111,682	3,851
9月	167.358	17	13	83,679	2,789
10月	188.403	22	8	94,202	3,140
11月	169.964	20	9	84,982	2,930
12月	190.459	28	2	95,230	3,174
合計	2568.215	238	117	1,284,108	1日平均 3,617

(金493両3分と銀8匁4分3厘4毛、金1両=5貫200文)

*ただし、帳面の合計金額は2568.231文と記されている。

*月によって2文で割り切れない場合がある。その場合は繰り上げとした。

年までをみてもおおそ年間100〜140万人が利用しています。

それではどういった人々が利用していたのでしょうか。史料には詳しく記されていませんが、例えば深川から日本橋へ通う番頭さんや職人さん、日本橋方面へ向かう物売りなど生活に利用する人々はもちろん、逆に深川へ遊びに来る人々、また大山や富士山へ向かう大山講、富士講の人々など娯楽や信仰を目的とした人々も大勢往來したことでしょう。

財政の逼迫

大風雨や火事によって落ちた橋を再建するには莫大な費用がかかり、町は借金をしてこれに充てました。例えば天明6年の大風雨によって流された橋を再建するため翌7年に818両の赤字を出しています。このように新大橋は何度か落橋し、その度に莫大な借金をして架け直しましたので、次第に運営が厳しくなってきました。それだけでなく、毎年借金の利子に苦しむようになるのです。多いときには利子だけで年間164両と、渡銭収入の1/3強にわたりました。さらに追い打ちをかけるように寛政2年には財源の2つであつた川浚いの請負と、本所相生町・深川橋富町の権利が召し上げられてしまいます。それでも町方は管理を続けますがとつとつ力尽きます。

寛政9年の焼失、管理放棄へ

寛政9年(1797)11月、神田佐久間町から出火した火事は東へ向かい、新大橋を巻き込みました。このような非常時に活躍したのが「新大橋役舟仲間」といわれる船頭組合です。深川元町と海辺大工町の2組があり、彼らは普段、隅田川での諸稼ぎが認められた代わりに、このような出火や出水の時

に救護船を出したり、後片付けをしたり、橋を再建している間の渡船を行いました。

しかし、町方には橋を架け直す財源はなく、仮橋でしのぎ、公儀に再建を依頼します。そして文化5年(1808)11月に幕府による架け替え工事が完了し、翌年2月29日に新大橋の管理は町方の手を離れ、菱垣回船十組問屋が引き受けることになりました。以後、無銭橋となり、最終的には文政2年(1819)に町奉行掛かりになり、幕府が管理・運営することになります。



明治43年『東京名所写真帖』
(国立国会図書館所蔵)

『鬼平犯科帳』で長谷川平蔵が活躍した時代も新大橋、永代橋は渡銭料が必要でした。きつと密偵相模の彦十やおまさもここを通るときには2文を払って渡ったのでしょね。

(文化財専門員 赤澤春彦)

大江戸を掘る！

白河二丁目遺跡 海辺大工町跡

6月15日から19日にかけて白河二丁目で埋蔵文化財の立会調査をしました。場所は深川江戸資料館から少し東へ進んだ所です。ここは江戸時代、黄檗宗の万祥寺というお寺の門前にあった海辺大工町という町でした。

この一帯は今でも「深川の寺町」と呼ばれるように、靈巖寺や雲光院などの寺院や大名屋敷が建ち並ぶ閑静な場所でした。ここから江戸時代末期の町の遺構や遺物が発見されたのです。



調査地位置図(文久2年本所深川絵図を加工)

まず、地下2・1mの所から木樋(木製の水道管)が見つかりました(写真1)。3枚の板材をコの字に組み合わせてあり、高さは16cm、幅は20cmほどです。生活排水などを流した下水管だと思われる、江戸時代のこの地域に下水管が通っていたことがはつきりしました。

さらにこの木樋の下から(地面から2・3m)大量の蛎殻がまとまって出てきました(写真2)。深さ50cmほどの穴が2基あり、大きさはそれぞれ3・6m×3・6mと7m×4mほどです。蛎を剥いた後でまとめて捨てた跡だと思われる。深川の蛎といえば江戸でも名高い名産のひとつで、貞享4年(1687)の「江戸鹿子」や享保20年(1735)の「江戸砂子」といった地誌にも紹介されています。昭和36年に漁業権を放棄するまで獲られ、問屋に納めるため漁師の家族が総出で殻を剥いていたそうです。

また地下2・6mのところから直径40〜45cmの桶が2基見つかりました。ひとつは井戸、もうひとつはトイレだと思われる。この他にも徳利や茶碗などの生活用品が出てきました(写真3)。

我々が住んでいる地面の下には江戸時代の生々しい痕跡がまだまだ残っています。



写真1 木樋



写真2 蛎殻



写真3 出土した生活用品

ココにも歴史があつた

使われてきました。

写真の刺子は、襟がついているタイプで、コートのようにボタンで留めるようになっていきます。前たてには、上に「材木船組合」、下前に「大黒屋」とあり、背中には「木場」の文字が入っています。

木場の材木問屋では、近所で火事があった時にはいち早く消火活動ができるように消防用の刺子を用意していました。この刺子もそうしたものの一つでしょう。

この刺子は、平野にお住まいだった佐藤和夫さんから寄贈いただいたものです。

(文化財主任専門員 向山伸子)



右の写真は、刺子と呼ばれるもので、綿布を重ね合わせて一針おきに縫ったものです。二重になっているので大変丈夫で、また水を吸い込み燃えにくくなるため、江戸時代から火消装束として